

かんしょ品種・系統の生育経過型について

丸 峯 正 吉・坂 本 敏

(九州農業試験場)

かんしょにおいて生育経過型が明らかにされている品種数は少ない。このため特徴のある品種系統については生育経過を検討し、育成試験に利用する。

1. 試験方法

原料用に育成したコガネセンガン、ミナミユタカ、九州71、76号を供試し、下の方法で試験を行った。

年次	植付日 月 日	掘取日		栽培条件			
		月 日	挿苗後 日 数	肥沃地		瘠地	
				標肥	多肥	標肥	多肥
'77	5. 15	7. 12	57	○	○	○	○
		8. 16	92	○	○	○	○
		10. 27	164	○	○	○	○
'78	5. 15	7. 10	55	○	—	—	—
		8. 23	100	○	—	—	—
		10. 26	164	○	—	—	—

標肥区の施肥は育成試験に準じ、多肥区はa 当り成分量にして肥沃地はK 1kg, やせ地はN0.6kg, P0.96kg, K0.96kgを元肥に増施した。ここではつる収量の多い圃場を肥沃地, 少ない圃場をやせ地とした。

2. 試験結果および考察

コガネセンガンの55~57日目におけるいも重は7~11kg (a 当り以下同じ) であり、初期塊根肥大の程度は既成品種の中で最も大きい方に属すると思われる。92~100日目のいも重は1977年の肥沃地で64~71kg, やせ地で85~96kgであり、多肥の効果ならびに肥沃度による差異がみられた。また1978年は158kgであり、この時期には環境条件の差異によるいも重への影響が明らかになると考えられる。164日目においては肥沃地で201~308kg, やせ地で257~268kgであり、やせ地での肥大は鈍化しているのが特徴としてあげられる。1978年肥沃地では367kgで極めて多収を示した。他の3品種系統についてはコガネセンガンを標準にして、これに対する比率による推移

を第1表に示した。55~57日目においてミナミユタカは極めて少収であり、九州71号は多収で肥大が大きいことが注目される。92~100日目においてはミナミユタカは前回調査と同様最も低収であったが、コガネセンガンとの収量差は縮小しており、やせ地ではほぼ同程度の収量を示した。これとは逆に九州71号は塊根肥大が鈍化し、やせ地においてその傾向は大きかった。164日目においてはミナミユタカは肥大率が高く、やせ地ではコガネセンガンを上回る成績を示した。九州71号は肥大が緩慢であり、とくにやせ地においてコガネセンガンに対する比率が低下した。九州76号はコガネセンガンと同様の推移をするものと考えられる。このように4品種系統は栽培条件によって様相が異なるが、生育経過型としての傾向は一定であり、ミナミユタカは生育後期の肥大がすぐれ九州71号は極く初期の肥大が大きいことが特徴としてあげられる。コガネセンガンと九州76号は生育全期に亘って肥大の大きい型であるといえる。

以上のようにでん粉含量の高い品種系統においても生育経過型が大きく異なることが明らかになり、このことは今後の原料用品種育成のため参考になると考えられる。

第1表 標準比率による総いも重の推移

圃場条件	品種名	掘取期(挿苗後日数)		
		55~57日	92~100日	154日
肥沃地	ミナミユタカ	38%	60%	96%
		61	82	91
	九州71号	123	111	81
		117	95	82
	九州76号	64	100	111
		129	104	96
瘠地	ミナミユタカ	59	104	117
	九州71号	156	85	75
	九州76号	120	142	127

注) 標準品種: コガネセンガン
肥沃地の上段1977年, 下段1978年